

モーセ⑤

□モーセの信仰の手本

信仰によって、彼は長子を滅ぼす者が自分たちに触れることがないように、過越の食事をし、血を振りかけました。（ヘブル 11：28）

□これまでの振り返り

1. アブラハム契約・・・神は、全人類の中から一人の人、アブラハムを召し出し、彼に3つの約束を与えた。土地の約束、子孫の約束、祝福の約束である。神はその約束を確かなものとして、アブラハムと契約を結ばれた。3つの約束のうち、土地と子孫の約束はイスラエル民族だけに対するものであるが、これらを通してアブラハムは復活信仰に導かれた。
2. 3つ目の祝福の約束は、イスラエル民族だけでなく、全人類に関係する。「地のすべての部族は、あなたによって祝福される」。その祝福とは、アブラハムが信じた復活である。アブラハムの信仰にならい、神には死者を生かす力があると信じるなら、全人類、だれであっても神から復活の祝福を受け取ることができる。
3. アブラハム契約が必ず成ると信じる信仰は、復活を信じる信仰でもある。この信仰が、アブラハムからイサク、そしてヤコブ、さらにヨセフへと継承された。
4. エジプト寄留・・・ヤコブは、ヨセフの功労によりエジプト王から国賓の待遇を受けて、家族とともに飢饉を避けてエジプトに寄留することになった。神はヤコブに、恐れずエジプトへ行くように命じた。なぜなら、かつて神はアブラハムに、【子孫たちが他国で寄留者となり、400年間、奴隷となる】（創 15：13）と預言していたからである。実際、寄留開始から 30 年でヤコブの子たちは移動の自由を失い、それから 40 年後にヨセフは死んだ。
5. モーセの両親・・・奴隷状態になってから 320 年後、モーセが生まれた。モーセの父はアムラム、母はヨケベデ（出 6：20）、彼らはエジプト王によるイスラエル民族迫害の中で、命の危険を冒してモーセを隠した。アブラハム契約の約束に基づき、神が必ずエジプトから救い出してくださると信じ、生まれた子どもに神の使命があることを啓示されたからであった。彼らは信仰によって、エジプト王を恐れない勇気を得たのであった。
6. モーセ
モーセ①・・・「個人的な信仰」の手本。モーセはエジプトの王ファラオの娘に養子として引き取られ、王族としての教育訓練を受けた。しかし、彼もまたアブラハム契約を信じる信仰を持ち、40歳のときにその信仰によって、勇気と決断を発揮した。彼は「ファラオの娘の息子」と呼ばれるより、神の民であるイスラエルと苦しみを共にすることを選んだ。

モーセ②・・・「神の使命を行う者としての信仰 その第一 忍び通す信仰」。モーセは40歳のとき、自分の判断と力によって神の使命を行おうとして失敗した。彼はエジプトから逃げて遊牧民のもとに身を寄せ、神の時を待ち続けた。神の使命を行う前に、自分の判断や力によらず、神の時と神の方法を待ち続ける信仰が必要である。

モーセ③・・・「神の使命を行う者としての信仰 その第二 神の時と神の方法を受け取る信仰」。モーセが遊牧民のもとで羊飼いの仕事に従事して40年間、80歳のとき、シナイ山（神の山ホレブ）で神がモーセに現れて言われた。「今、行け。イスラエルの民を導き出すためにエジプトに行け。」このとき、モーセは自分にはそのような力はないと何度もしり込みをして神の怒りが燃え上げるほどであったが、神はモーセのために兄アロンを同行者として選んでおられた。このときのモーセの態度は、自我が砕かれていた証明であった。神の使命を行う者が神の時と神の方法を受けとるためには、自我が砕かれている必要がある。

モーセ④・・・「神の使命を行う者としての信仰 その第三 自分の力に頼らない信仰」、とことん自分の力を頼りにせず、神に頼る信仰である。実際、モーセがエジプト王ファラオに会って神のことばを告げても、ファラオは聞き入れず、イスラエルの民にさらに重い労働をさせた。そのためイスラエルの民までもモーセの言うことを聞かなくなった。それでも神がモーセにファラオに告げよと命じられたので、モーセは「私が言うことなどファラオが聞くでしょうか。私は口べたなのです」と神に訴えた。神は次のように答えた。

- あなたとあなたの兄アロンは、わたしの命じることをファラオにことごとく告げなければならない。
- しかし、ファラオはあなたがたの言うことを聞き入れない。
- そこで、わたしはエジプトに手を下し、大いなるさばきによって、イスラエルの子らをエジプトの地から導き出す。このとき、エジプトは、わたしが主であることを知る。

神のみわざがなされるときには、人の雄弁さ、説得力、実行力は決定的要素ではない。モーセが自分の力に頼りにせず、神に頼ることこそが必要である。なぜなら、人の力で行き詰まったところから、神のみわざが始まるからである。

今回はモーセ⑤、「神の使命を行う者としての信仰 その第四 神の進め方に従う信仰」である。

□モーセ⑤ 神の使命を行う者としての信仰 その四 神の進め方に従う信仰

1. 【前回の内容】主の命令とモーセの訴え（出6：28～7：7）

(1) 主の命令

6：28～29 主がエジプトの地でモーセに語られたときに、主はモーセに告げられた。「わたしは主である。わたしがあなたに語ることをみな、エジプトの王ファラオに告げよ。」

(2) モーセの訴え

6：30 しかし、モーセは主の前で言った。「ご覧ください。私は口べたです。どうしてファラオが私の言うことを聞くでしょうか。」

(3) 主の譲歩

7：1～5 主はモーセに言われた。「見よ、わたしはあなたをファラオにとって神とする。あなたの兄アロンがあなたの預言者となる。

あなたはわたしの命じることを、ことごとく告げなければならない。あなたの兄アロンはファラオに、イスラエルの子らをその地から去らせるようにと告げなければならない。

わたしはファラオの心をかたくなにし、わたしのしるしと不思議をエジプトの地で数多く行う。しかし、ファラオはあなたがたの言うことを聞き入れない。

そこで、**わたしはエジプトに手を下し、大いなるさばき**によって、わたしの軍団、わたしの民イスラエルの子らをエジプトの地から導き出す。わたしが手をエジプトの上に伸ばし、イスラエルの子らを彼らのただ中から導き出すとき、エジプトは、わたしが主であることを知る。」

(4) エジプト脱出の全体像

7：6～7 **そこでモーセとアロンはそのように行った。主が彼らに命じられたとおりに行った。**彼らがファラオに語ったとき、モーセは80歳、アロンは83歳であった。

2. エジプトに対する主のさばき【9つの災害】・・・モーセとアロンはその都度、主が言われた通りに告げ、おこなった（出7：14～10：29）

(1) 事前告知・朝。アロンがナイル川の水を杖で打つ。水は血に変わり、川の魚は死に、川は臭くなって、その水を飲めなくなる。エジプトの呪法師たちが真似した（出7：14～25）

➤ 「木の器や石の器」（出9：19）＝偶像にささげる飲み物を入れる器

- (2) 事前告知。アロンが杖を持って、手を川・水路・池の上に伸ばすと、蛙が群がり、エジプトの地の上に這いあがって来る。エジプトの呪法師たちが真似した（出8：1～15）
- (3) アロンが杖を持って手を伸ばし、地のちりを打つと、ブヨとなり、人や家畜に付いた。エジプトの呪法師たちは真似できず、真の神が働いておられることを認め、以後対抗できず（出8：16～19）
- 「ブヨ」：ヘブル語の原語の意味は「混成群」。ブヨに限らない。人や家畜に付いて刺す小さな昆虫類の大群を意味し、アブ、ブヨ、しらみ、のみなどが大量に発生した。
 - 18節 呪法師たちは真似できず、彼らの体にも虫たちが付いた。呪法師たちはエジプトの神殿での祭司職であるが、彼らは頭髮だけでなく、眉毛も含めて全身の毛をすべて剃り上げていた。虫がつかないようにして聖潔さをアピールするためであったが、無力であった。
- (4) 事前告知・朝。アブの群れて地面が満ちる。ただし、イスラエルの民がいるゴシェンの地にはアブの群れはいない。（出8：20～32）
- 「アブ」：ここは、ハエの大量発生。
 - ハエの神、バアルゼバブ。この神がハエの数をコントロールしていると信じられていたが、この神の無力さが明らかになった。
- (5) 事前告知。エジプトの家畜に重い疫病が起こる。イスラエルの家畜は一頭も死なない。（出9：1～7）
- (6) モーセがかまどのすすを両手いっぱい取って、ファラオの前でそれを天に向けてまき散らす。エジプト全土にわたって、ほこりとなり、人と家畜に付き、うみが出る腫れものとなる。エジプトの呪法師たちも腫れもののためにモーセの前に立てなかった。（出9：8～12）
- かまどは、レンガを焼くときに使うもの。エジプトがイスラエルの民に課した苦役に対するさばきである。
- (7) 事前告知・朝。モーセが杖を天に向けて伸ばして、主が雷と雹を送り、火が地に向かって走る。事前警告を無視して野にいた人々や家畜は雹に打たれた。ゴシェンの地には雹は降らなかった。（出9：13～35）
- (8) 事前告知。モーセが杖を地上の上に伸ばすと、いなごの大群がエジプト全土を覆い、雹の害を免れて残されているものを食い尽くす。（出10：1～20）
- 10：11でファラオがモーセとアロンに言った。「**悪意がおまえたちの顔に表れている**」→（直訳すると）「**『ラ』が、おまえたちの前にいる**」『ラ』、ヘブル語でラと発音すると「悪」を意味するが、エジプトの神々の中で中心的な神の名は「ラ」である。偶像の神「ラ」がモーセたちの前に立ちほだかるだろう、とファラオは言ったのである。

- (9) モーセが天に向けて手を伸ばすと、エジプト全土が三日間、真っ暗闇となる。人々は三日間、互いに見ることも、自分のいる場所から立つこともできなかった。しかし、イスラエルの子らの住んでいるところに光があった。(出10:21~29)

3. なぜ、主は順次9つの災害を、おそらく半年くらいの時間をかけて、エジプトに下したのか？

- (1) 主が一瞬のうちにエジプトを滅ぼし、イスラエルの民を解放することは可能であった。イスラエルの民がエジプトを脱出できたのは、反乱蜂起によるのではなく、また逃亡に成功したわけでもない。まさに神によって導き出されたことが誰の目にも明らかとなるためである。7番目の災害の事前告知のときに、主がモーセを通してファラオに告げたことばは、次のとおり。

9:15~16 実に今でも、わたしが手を伸ばし、あなたとあなたの民を疫病で打つなら、あなたは地から消し去られる。しかし、このことのために、わたしはあなたを立てておいた。わたしの力をあなたに示すため、そうして、わたしの名を全地に知らしめるためである。

- (2) 9つの災害に加え、さらに最後にエジプトのすべての家でその家の長子が死ぬという災害が加わる。従って、災害は全部で10である。これらの災害を通して、エジプトの80もの偶像の神々が主の前に無力であることが明らかにされた。
- 12:12 その夜、わたしはエジプトの地を巡り、人から家畜に至るまで、エジプトの地のすべての長子を打ち、また、エジプトのすべての神々にさばきを下す。わたしは主である。

- (3) 主は無秩序に多くの災害を下したのではない。9つの災害は3つずつ、3つのセットに分けて見ると・・・

- ① 事前告知があったかどうか：各セットの最初の災害には必ず「事前告知・朝」、2番目の災害には「事前告知」がなされた。
- ② 誰が手を伸ばしたか：第1セットはアロンが手を伸ばし、第2セットは神の御手、第3セットはモーセが手を伸ばした。
- ③ エジプトの呪術者の対抗があったか：第1セットで対抗してきた。3つの災害のうち、1番目と2番目の災害では彼らは真似できたが、3番目はできなかった。第2セットと第3セットでは、対抗すらできなかった。
- ④ エジプトとイスラエルの民の間で災害が及ぶかどうかで区別はあったか：第1セットは区別なし。第2セットと第3セットは区別がなされ、神のみわざであることがより明確になった。なお、10番目の災害では、エジプトとイスラエルとの区別ではなく、【過越の羊の血を自分の家に出入口の柱と鴨居に塗っているかどうか】という条件での区別があった。

4. 10番目の災害：エジプトの地の長子たちが主に打たれて死んだ。モーセは、長子を滅ぼす者が自分たちに触れることがないように、過越の食事をし、血を振りかけた。

(出12:1~32、へブル11:28)

- (1) 「滅ぼす者」(出12:23)：シャカ「破壊」= 破壊という呼称を持つ天使
 - 参考：悪霊には、「破壊」と呼ばれる者がいる(詩91:6、黙9:11)
- (2) 「過ぎ越す」：シャカが、血を塗った家の長子に触れずに通り過ぎていくこと
- (3) 「過越の食事」とは、家ごとに10日から準備していた羊を14日の夕暮れに屠り、その血を家々の入口に塗ったあと、夕食にその羊の肉を焼いて食べる食事のこと。エジプトを出発する直前の食事で、旅支度をして食べた。
- (4) 「血を振りかけた」というのは・・・モーセがイスラエルの民に命じて、
 - ① 家族ごとに、その月の10日に、羊を群れの中から取り出し
 - ② 14日までその羊をよく見て傷のないことを確認し(これが「過越の羊」)
 - ③ 14日の夕暮れにこれを屠り(ほふり)、その血を自分の家の入口(二本の門柱と鴨居)に塗らせたことを指す
 - ④ 滅ぼす者は、その血を見て、その家を通り過ぎたので、家の中にいたイスラエルの民の長子たちは死ぬことがなかった。
- (5) その夜、ついに、ファラオがイスラエルの民に出国を認めた。(出12:31~32)

□神の使命を行う者には、神の進め方に従う信仰が必要。神のみわざであることが明らかとなるためである。人が称賛を受けるなら、それは神の進め方ではない。

◎=事前告知・朝、○=事前告知

